

# Humanity & Nature Newsletter



●特集——2  
第1回国際シンポジウムより——06

写真コンテスト「いのちの水」

no. 5

1 December 2006

目次

巻頭対談——02

地球研の哲学を語る

総合地球環境学研究所所長 | 日高敏隆

大阪大学理事・副学長 | 鷲田清一

●特集——1  
研究プロジェクトより——04

水域の生態史を探る

生態史プロジェクト | 秋道智彌

地球研だより——08

カラホト(黒水域)の国際シンポジウム/

琵琶湖—淀川プロジェクト・国際ワークショップ

第2回地球研地域セミナー/

オストロム教授が「レジリエンス」セミナー/

FS研究計画発表会/

第14回市民セミナー/

招へい外国人研究者/

インダス・プロジェクトの成果がインドで出版

お知らせ——12

プロジェクト研究発表会/市民セミナー/

「人と水」連携塾/「水と文明」シンポジウム/

上賀茂だより



## 地球研の哲学を語る

■ 日高敏隆 [総合地球環境学研究所所長]

鷲田清一 [大阪大学理事・副学長]

——鷲田さんは、いま我々が楽しんでいること、悩んでいることを、それはこういうことだよと、専門用語を使わずに説明できる稀有な哲学者として人氣が高く、著書も沢山出しておられますが、一番新しい本が『「待つ」ということ』（角川選書396）ですね。実は日高所長が『波』という雑誌に連載しておられていて、その最新号(9月号)が「待つこと」なのです。

鷲田 奇遇ですね。私の本のなかみをひとことでいいますと、ひとは何かを期待して一生懸命待ちますよね。じりじりしてくる、心が乱れ空転する。そういうふうに何かを強く期待することを逆に放棄して、その間に起きる小さな偶然の出来事や何かの変化が起こることをいつでも受け入れられるようにフツと力を抜いておく、そういうことでしか、ひとは本当の意味で待つということとはできない。要するに、待つことの放棄が本当の待つことなのだと。そういう、ひねくれた結論なのです。

日高 私は昔からそういう待ち方が得意なほうでしたね。生物学者はだいたいそうですよ。生き物の観察や実験は、待つのが苦手だとできませんから。例えば、夏になるとセミの幼虫が出てくるでしょう。木を上ってきて、とまって、そのうち背中が割れて親のセミの頭が出てきますね。そのところまでは実にダイナミックで、「出てきた、出てきた」と言ってみんな面白いんです。ところが、体の半分ぐらいが出て、まだ翅が出ていない頃に、セミは途中で仰向けになってしまって、それでずーっとそのまんま1時間から2時間動かないのです。それをじっと

待つんです。

鷲田 そんなに長くですか。

日高 そうなんです。ちっとも動かなくなるから、見ているひとは大抵飽きてしまう。子どもなんかは、寝てしまうのですね。だけどじっと我慢して待っていると、セミはやおら起き上がって、体を全部抜き出し、出てきた翅を伸ばし始めるんです。それでやっとセミになる。

鷲田 その待っている間に、何が起きているんですか。

日高 セミは幼虫のときは土をガシガシ掘ったりするから頑丈な殻を持っています。けれどそのなかにできてくる親のセミの体は柔らかいのです。柔らかくてしなやかだから、うまく殻から抜け出せるのです。ところが親になったら、飛んでいって木にとまらないといけないから、手はしなやかでも爪は硬くなければいけない、だから半分抜けたところで、爪が乾いて硬くなるのを待っているわけです。我慢できなくなって人間が手を貸したりすると、落ちて死んでしまいます。

鷲田 爪を乾かしているのですか。

日高 ええ、固まるまでに1時間も2時間もかかるのです。

鷲田 その1、2時間は人間にとっては長いですけど、セミが地上に上がってくるまでの長大な時間に比べると、一瞬のことですね。

日高 それまで6年ぐらい土の中にいますからね。

鷲田 面白い人生ですね。セミに「人生」というとおかしいですが。しかし、人間の成長にも似たところがありますね。焦らずに時が経るのを待たないと

いけない場合がある。なにか教訓的なものを感じますね。

——人間は環境に関しては、なぜ待てないのでしょうか。開発するときも、環境問題に対処するときも。

日高 それは、自然を早く支配したいからなのでしょう。近代の工学的発想ですね。それをしようと思ってもなかなかできない時代には、「まあまあ、待てよ。そのうち何とかなるかもしれない」という具合にやっていて、そう乱暴なことはできなかったはずなのだけれども、これはこうしたらできるとわかったら、さっさとやろうということになって、もう待てないのです。近現代は、そういうことばかりをやってきたような気がします。そういう意味では「待つ」ということは、本当はすごく大事なことでないかと思いますね。

鷲田 環境問題では、すべてを一挙に解決しようと考えること自体が、ひょっとしたらそぐわないのかなと思うのです。例えば森林の問題とか、水源の問題とか、そういうときに人間はこの環境の問題を解決できるのは人間だけだと、あいかわらずまたアントロポセントリズム（人間中心主義）で考えてしまうんですね。

日高 まさにおっしゃるとおりです。地球上に動物は100万種類から200万種類いるけれど、地球環境問題なんていうものを起こしてしまったのは人間1種だけなのです。人間は自然を支配して生きるような生き方、つまり「人間の文化」を持ってしまったからですね。だから、環境問題が起きたときも、「この問題は人間たちが引き起こした







のだから人間が解決しなければいけない」と大真面目に考えて、また必死でやるんですね。人間は環境を壊すことは簡単にできるけれど、もとに戻すことはそう簡単にはできないのです。あせって何かやろうとしたら、また別の問題を起こしてしまいます。もしそこに「待つ」という姿勢を入れるならば、ある程度やってみて、待って様子を見るというようなことができるのです。地球研はそのあたりの問題の構造、自然と人間文化の関係を、じっくり総合的に考えるために作られた研究所です。この研究姿勢が、いわば地球研の哲学です。

**鷺田** それでHumanity & Nature、総合地球環境学研究所、なのですね。

**日高** 最初は地球環境科学研究所を作ろうという話だったのですが、「科学」というより、「総合」をつけることのほうが大事だと思ひましてね。

**鷺田** 私も、それがすごく重要だと思いますね。「分かる」と「分ける」が同じ「分け」からきていて、「理」（ことわり）は「事割り」でもあるように、サイエンスの語源であるscio（知る）もscindo（切る）と深いつながりがあるのかもしれない。実際、科学はどんどん細分化してきました。ところが、現実世界では環境問題でも民族紛争でも、少子化問題でも、一つの学科だけでは絶対に捉えられない問題が、世界で次々に起こってきて、学問の総合性が要求されるようになった。その結果、

「総合科学」ということが、60年代あたりからすいぶん言われて、その次に「学際的研究」、今は「融合領域」とかいうようになったのですが、それをどうやってやるのか、という研究運営の作法やスタイルがなかなかできないのが現実ですね。異分野の人間がシンポジウムのようなかたちでイベント的に集まることは簡単にできるのですが、日常的にそれをやろうというと、そのデザインが非常に難しい。地球研はプロジェクト主義で、多分野の研究者をひとつの研究プロジェクトに投入して、日常的にそれをやろうとしておられる点がユニークですし、先程この新しい建物を見学させていただいたのですが、研究室を大きなワンルームにしてしまわれたあたりに、新しい「総合研究」のスタイルを作ろうとしておられる意欲を感じます。

**日高** 一生懸命考えて、ああいうふうにしたのですが、以前小学校にいたときのほうが、もっと密集効果、総合効果があったような気がして、実は近頃ちょっと反省しているのですよ。

**鷺田** 昔ある方から、アブラムシは密集して箱に入れておくと育ちが悪いし、1匹ずつ広々としたところに入れてもだめで、ヒゲが触れるか触れないかぐらいのまばらにしておくとかちょうどいいと聞いたことがあります、そういうことですか。

**日高** そうなんです。あまり混みすぎてもいけないし、バラバラにして単独

にしてもいけない。毛虫にもそういうのがいます。隣の毛虫とこっちの毛虫の毛の先がちょっと触れ合う程度がいいんです。毛が触れ合っていると「ああ、隣に仲間がいるな」という安心感があるらしいのです。それがなくなると不安なのでしょう、とにかく誰かと毛が合うまでやたらに歩き回るので。そのときに筆が何かを出しておいてやると、そこへ来ると安心する。自分の毛が筆の毛に触っていると安心して葉っぱを食べ始める。

**鷺田** 筆でもいいのですか。面白いですね。

**日高** いいらしいのです。何か毛のようなものがなければいけない。それがないととにかく毛に触るまで歩き回る。それで結局飢え死にするのです。

**鷺田** 餌があっても飢え死ですか。

**日高** そうなんです。ですから、「密度が高いのは悪い環境である」なんてことを簡単に言うてはいけないわけです。環境問題には、人間がまだ気がついてない、そういう大事なことが、いっぱいあるのではないかと考えています。

**鷺田** 研究しなければならない課題が、沢山あるということですね。発足から5年たって、研究成果も次々に出始めているようですから、ご活躍を期待しております。

**日高** ご期待にそえると嬉しいのですが。

——ありがとうございました。

**鷺田** きょうは、久しぶりにいい環境で、ゆっくりと、楽しい時間をいただきました。



2006.9.8  
地球研 中庭にて  
聴き手: 斎藤清明  
[撮影: 二村春臣]

生態史プロジェクトでは、中国雲南省、北タイ、ラオス全域を対象として過去50—60年における人間と環境とのかかわりの動態に関する調査研究をおこなってきました。各メンバーはモンスーン地域における資源利用と生業複合の変容の解明、栄養と健康に見られる変遷過程の評価、中国雲南省の『県史』による生態年代記の編さんと歴史的な碑文の環境史的な解析などを進めています。これらの研究の多くは陸域における人間と環境の相互作用についてのもです。そのいっぽう、メコン河とその集水域や池、水たまり、水田を含む水域の問題に取り組んでいる仲間もいます。

生態史プロジェクトの水域に関連した分野の研究としては、ラオス中部のビエンチャン平原における水を中心とした資源利用と空間利用の研究があります。そこでは、野中健一さん（地球研）のグループ（通称、ズブズブ班）がメコン河支流の集水域における水位が乾期と雨期とで5m以上も変化する生態学的な移行帯の存在に注目し、湿地や季節的な氾濫原の多面的な利用についての研究を進めています。

水域固有の問題を扱う研究としては、水田藻類と稲作農耕との関連性（藤田裕子）、さまざまな種類の水草の利用（鯨坂哲郎）、カニや魚に寄生する肝吸虫、肺吸虫などを媒介とする水系感染症（中村哲）、笠漁具の物質文化（後藤明）、漁場利用と竹・藤の利用（大西秀之）、モンスーン地域の季節変化と漁具の使い分けの問題（橋村修）、水域の利用と共有、水産資源管理の変容（秋道智彌）などがあります。

## 水域の生態史を探る

## ■

アジア熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005

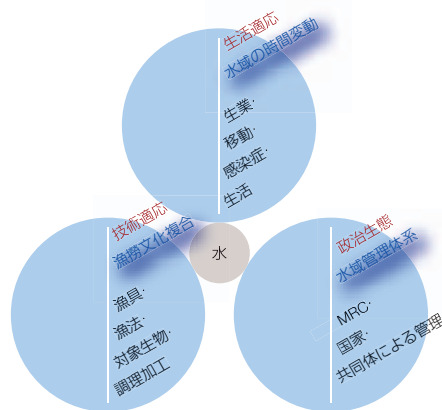
〔通称：生態史プロジェクト〕

## ■

秋道智彌〔地球研教授〕

水域の研究は以下のように大きく三つの流れに沿って進めてきたわけですが、さらにそれらを統合する枠組みを構築したいと考えています。

第1は、淡水漁業の複合からモンスーン地域全体を空間的に捉える試みです。通称で FCC（Fishing Culture Complex）と呼んでいる研究では、漁



具・漁法とその利用の季節性、対象生物と漁場利用の特性、水域由来の食料資源のインベントリーと調理加工方法などを地域や民族ごとの複合としてクラスター分析をおこないます。漁業の文化から環境条件や民族によるちがいを明らかにすることができればと考えています。またFCCは稲作文化複合



図／上—

モンスーン・アジアにおける水域の生態史構築に向けて

写真／上—

ラオス南部のボロベン高原の小川にたも網で漁にいく少数民族の子どもたち

写真／下—

ラオス南部のため池で釣りをして遊ぶ子どもたち



(RCC:Rice Culture Complex)の研究とともに、モンスーン地域における文化の同質性、異質性を明らかにすることがねらいです。FCCとRCCを結合した生業複合がモンスーン地域の文化としてどのような性格のものであるかを探ることが最終のねらいです。

第2は、水域の利用に関する権利関係、あるいは規則、さらには水をめぐる紛争などを取り上げるもので、陸域での共有地や資源管理の問題とも連動するものです。とくに、それぞれの共同体が共有域として利用してきた水域（魚類の保全区、ため池）などが近年、私有化されるとか、オークションを導入して売却されるような動きがあります。水田における漁撈もオープンアクセスの場合から入漁が規制される場合まで多様な形態が見られます。また、

河川的环境変化や開発がどのような問題を引き起こしてきたかを探ることも重要です。たとえば、メコン河では2000年以降、中国からの国境交易の拡大に呼応してダイナマイトによる拡幅がおこなわれ、生態系への影響が懸念されています。ラオス南部では河川における砂金採掘業が2003年に開始され、地域の住民との対立が生じ、結局、住民の反対で砂金採掘は中止となりました。このように、国家による管理から共同体による規制、メコン委員（MRC）による規制、多国間協定まで、多様な「水域管理」の実態と変化があり、それらの総体を明らかにすることが大きな目的です。

第3は、モンスーン地域の特徴である水の季節的な変動に注目して、農業、林業、漁業、食料資源、病気の発生な

中国雲南省昆明市でのシンポジウムを終えて。  
前列左から2番目が筆者。  
佐藤、奥宮、阿部、友岡さんらの顔も見える。  
筆者の右横は中国のカウンターパートの尹 紹亭さん。



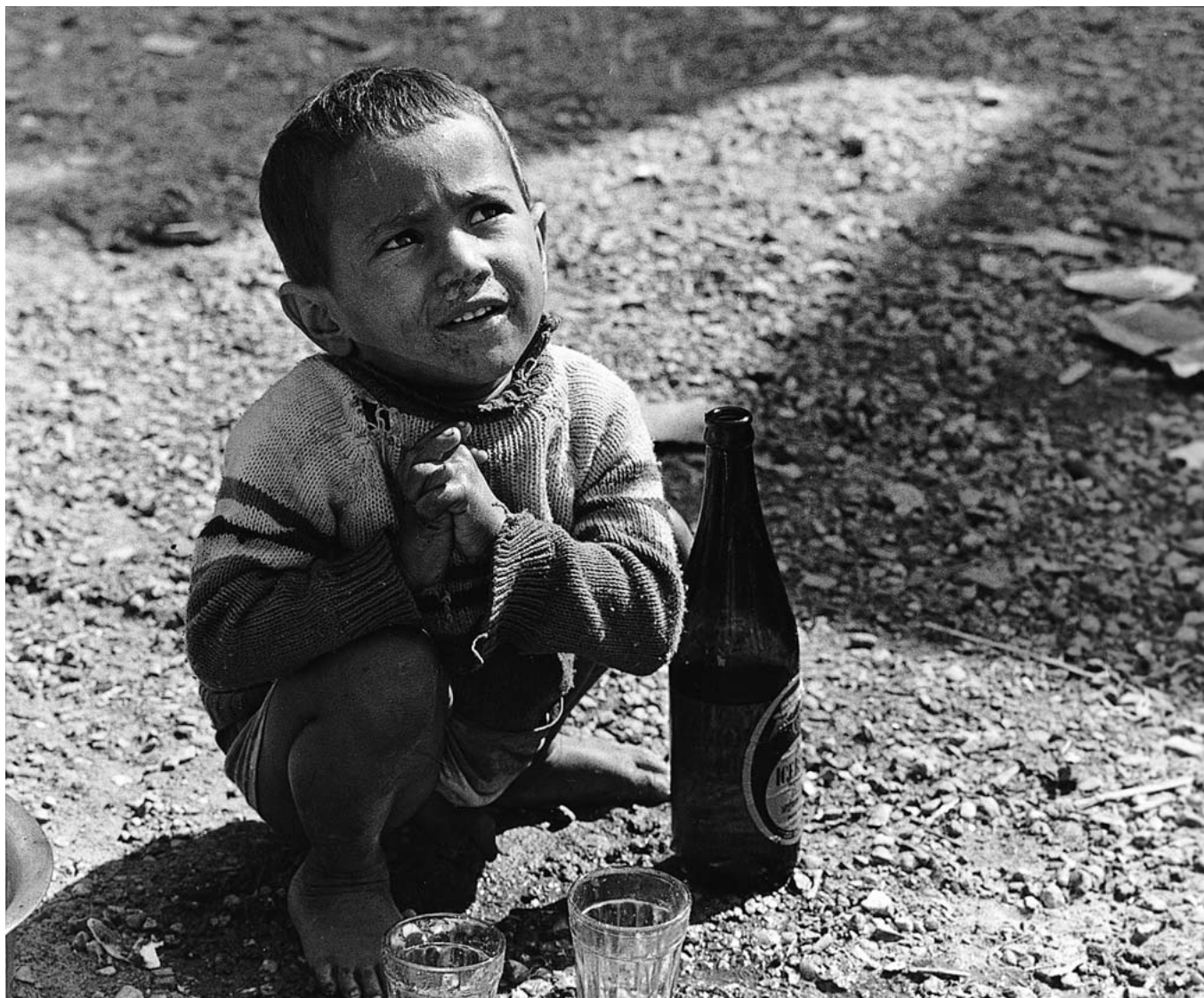
どのサイクルやその年変動を明らかにすることです。水位の季節変動は農業活動に大きな影響を与えるうえ、季節的な移住、出稼ぎなど人びとの生活と密接にかかわっています。水に由来する感染症の発現はこの地域の特質となっています。また降水量の年変動が農業や人びとの生活にどのような対応をせまってきたのかも重要な課題です。水の変動と生活の変容の関係を時間軸にそって考察することによりモンスーン地域の特質が明らかになると考えています。

これらの三つの方向を、生態史つまり、1年というサイクル、経年変化、歴史的な時間軸にそった変化としてその動態を把握し、統合的な研究として収斂させることができればと考えています。



写真/上ー  
セドン川(メコン河支流)の支流で刺し網漁に従事するラオ人





写真／左頁／上—  
大賞—「大切な水」  
写真／左頁／下—  
準大賞—「挑戦」  
写真／右頁／上—  
優秀賞—「2月のお田植え」  
写真／右頁／中—  
優秀賞—「送る」  
写真／右頁／下—  
優秀賞—「小さな棹さし」

審査員



井上隆雄 [写真家]  
関口照生 [写真家]  
日高敏隆 [地球研所長]  
秋道智彌 [地球研教授]  
佐藤洋一郎 [同教授]  
斎藤清明 [同教授]  
桃木暁子 [同助教授]

地球研では、第1回国際シンポジウム「水と人間生活」(11月6―8日、国立京都国際会館)にちなんで、写真コンテスト「いのちの水」を催し、国や地域を問わず「水と人」が関係している写真作品を内外から募集しました。

一般の方々から所員まで、78人から257点の応募があり、その審査を10月16日に行いました。いずれも、人間生活とそれを支える水の関係を1枚でみごとに語る力作揃いで、審査員たちも選定に大変苦労しましたが、議論の末、次のように選ばれました。



#### 受賞者

地球研大賞 [日高賞]――1名	「大切な水」	谷口誠勝 [京都市]
地球研準大賞――1名	「挑戦」	坂本博優 [京都府福知山市]
地球研優秀賞――3名	「2月のお田植え」	佐久間文男 [山梨県北杜市]
	「送る」	西川芳子 [京都市]
	「小さな棹さし」	村田勲美 [兵庫県赤穂市]

#### 入選――44名[50音順]

「汚された水辺」	――	芦田英次 [京都市]
「アンコールのイネ」	――	石川隆二 [青森県弘前市]
「水と生きる」	――	石飛智穂 [京都市]
「大漁」	――	市川昌弘 [京都市]
「京都の学生」	――	伊吹直美 [京都市]
「湧水が育む醒ヶ井の梅花藻」	――	上村剛史 [京都市]
「水を運ぶ女性」	――	梅津千恵子 [京都市]
「メコン川・野菜売りの女性」	――	遠藤崇浩 [京都市]
「三江平原の水田」	――	大西健夫 [京都市]
「節水のおねがい」	――	小川安紀子 [京都市]
「思い出の亀くん」	――	河村美香 [京都市]
「水場」	――	久乗陽美 [京都府宇治市]
「霧の加茂川と植物園」	――	鞍田 崇 [京都市]
「おーい」	――	小柴 通 [京都府亀岡市]
「水と雲と人間と」	――	小林達也 [京都市]
「想い」	――	古見めぐみ [京都市]
「恵みの洪水」	――	斎藤暖生 [京都市]
「飲む」	――	佐伯田鶴 [京都市]
「うららかな春の日に」	――	坂本綾子 [京都府福知山市]
「沙悟堤」	――	佐藤嘉展 [京都市]
「乗せてくれないかな」	――	瀬尾明弘 [京都市]
「かばたと暮らす」	――	高橋正徳 [京都市]
「禊川」	――	田口葉子 [京都市]
「日常」	――	田中克典 [京都市]
「観光ヤナ」	――	田中拓弥 [京都市]
「雪山につづく道」	――	辻野 亮 [京都市]
「水遊び」	――	長柄俊治 [京都府舞鶴市]
「夏休み」	――	中野 豊 [京都市]
「水やり」	――	長野宇規 [京都市]
「船」	――	西村雄一郎 [愛知県愛知郡長久手町]
「水を飲む」	――	額田 拓 [滋賀県東近江市]
「我が家」	――	畑田 彩 [京都市]
「期待」	――	樊 浩 [宮城県仙台市]
「ダム・フェスティバル」	――	深井征子 [京都府宇治市]
「マニラの子ども」	――	細野高啓 [京都市]
「かぶやき集落一斉放水」	――	堀島信之 [京都府福知山市]
「禊(みそぎ)」	――	三谷 浩 [京都市]
「Go Go」	――	宮本裕章 [京都府宮津市]
「無題」	――	武藤千秋 [京都市]
「夕月」	――	村山祐一 [新潟県十日町市]
「はかない水の命」	――	森 豊彦 [京都市]
「農夫」	――	山下 聡 [京都市]
「仲良し姉妹」	――	寄田林次郎 [京都府宇治市]
「雨にも負けず」	――	和田昭子 [滋賀県大津市]



## カラホト(黒水域)の国際シンポジウム

中国・内蒙古自治区のエチナ（額濟納旗）で9月16—20日、地球研と内蒙古自治区文物局や額濟納旗政府、中国人民大学、中国社会科学院共催の「カラホトの歴史と環境に関する国際シンポジウム」があり、地球研「オアシス」プロジェクトのメンバーや中国はじめ、ロシアやモンゴル、米国から、約80人が参加。「オアシス」プロの研究成果が次々に発表されました。

カラホトは中国では黒水城と記され、エチナ・オアシスの中核都市として11世紀から14世紀にかけての「西夏」や「元」の時代に交通・軍事の要衝として栄えた歴史的にきわめて重要な地です。このシンポは、人と自然とのかかわりという視点でその歴史を総合的に見直し、乾燥地帯に位置するカラホトの盛衰が教えてくれることを再認識するのがねらい。「オアシス」プロの5年来の研究成果を示す晴れ舞台となりました。

シンポ開催地のエチナはマルコ・ポーロの『東方見聞録』にも登場する、カラホト遺跡に隣接するオアシスの町ですが、現在でも最辺境の地。銀川市（寧夏回族自治区の首府）から砂漠の道を860km、車でまる一日がかり。西夏研究で著名なロシアのクチャーノフ教授も「初めて来た」といいます。

シンポでは、中国の第一線の研究者や、そして地球研メンバーなどにより、人文系から自然科学系にまたがる幅広い研究発表が行われました。約100年前のコズロフ探検隊の収集品はもちろん、近年発掘の文書にもとづく研究などもあり、敦煌に勝るとも劣らないカラホトの重要性がクローズアップされました。地元にとってもこのような本格的な学会は初めてとのこと。テレビ局はシンポを連日のように取材し、放映。巡検の現場では、「オアシス」プロのリーダー、中尾正義教授にインタビューしていました。

砂に埋もれつつあるカラホト遺跡や、

ほとんど風化したそれ以前の城跡。水流が絶え絶えになっている黒河の下流域。干上がりつつあるソグ・ノール湖。今は小さな池ですが、かつては琵琶湖以上の広大な湖が存在したことを示す「居延澤」の湖岸線の跡…。これら、カラホトの光景は、人と自然をめぐるあり方を、深く認識させてくれました。（斎藤清明 写真も）





## 琵琶湖—淀川プロジェクト・国際ワークショップ

琵琶湖—淀川プロジェクト主催の国際ワークショップを、「琵琶湖の流域管理から始める地球環境学」(Hierarchical Watershed Management for Creation of a Watershed as a Public Space) というタイトルで、9月23日・24日の両日にわたって地球研講演室で開催しました。2002年度に始まった地球研の最初の5つのプロジェクトの一つとして、5年間の到達点と成果を関係者に紹介するとともに、今後の発展課題、地球環境学について議論をおこなう「総括」との位置づけです。コメンテータとして招待した、滋賀県の行政担当者、土地改良区の関係者、大学・研究機関の研究者、内外の流域管理の研究者・コンサルタントをはじめ、本プロジェクトメンバー、地球研関係者、京大生態学研究センター、地球環境フロンティア研究センターなどから、40名以上の参加者がありました。

本プロジェクトは、流域の「階層性」に着目し、流域管理のための環境診断と合意形成の方法論の開発をテーマに、研究を進めてきました。流域内の階層性に由来する、多様な利害関係者間の問題認識の違いが、流域管理の大きな課題であるとの認識に立っています。個々の階層の順応的管理を背景とした、多様な利害関係者によるガバナンスが、commonsとしての流域の管理を達成する上で必要となる。この考えをもとに、「階層化された流域管理システム」を提案し、琵琶湖流域における農業濁水問題を事例として、地域に密着した形で分野横断的研究を進めてきました。学術研究を軸としながらも、新たな地球環境学構築をめざし、一歩足を踏み出して、地元に着した実践的な試みをおこなってきたのが、本プロジェクトの一つの特徴です。

ワークショップは、琵琶湖流域の農業濁水問題を中心とした第1部(23日:2セッション)と、淀川下流域を含む多様な流域における、本プロジェクトの

階層性の視点からの方法論の可能性、発展課題の整理と議論を主とした第2部(24日:1セッション)の2部構成でおこないました。講演は、すべて本プロジェクト関係者(6名)がおこない、各セッションの発表のあとで、招待コメンテータ(11名)のコメントと参加者の自由な議論を約1時間ずつおこないました。

参加者との活発な議論の中で、新しい診断手法による琵琶湖の水質形成の影響評価、農業濁水問題を事例とした問題の全体像、住民参加型ワークショップなどコミュニケーションを促進する方法、これらの重要性がうかびあがりました。最後に、前リーダーである和田英太郎(現在:地球環境フロンティア研究センター)から、最近の地球環境問題研究の知見のアップデートと、「流域管理の夢とビジョンが見えるように話をまとめてほしい」というコメントでワークショップを終えました。

(琵琶湖—淀川プロジェクトリーダー 谷内茂雄)



## 第2回地球研地域セミナー

第2回地球研地域セミナーを9月18日、鹿児島市の鹿児島県歴史資料センター・黎明館で開催しました。昨年9月、富山市で開催の第1回は「雪と人：暮らしをささえる日本海」でしたが、今回は「火山と水と食：鹿児島を語る！」というテーマで、鹿児島の地域を特徴づける火山と水の問題を食に絡めてとりあげました。日高所長の挨拶のあと、中野孝教、秋道智彌ら5人のパネリストによる発表があり、鹿児島県は世界的な金鉱の産地であること、洪水と治水の歴史と経験、鹿児島の食と湧水、江戸期の海外交易と食、南北600kmのエコミュージアム論など、多面的に鹿児島の地域と文化、歴史の話題を取上げ、興味ある討論をおこないました。鹿児島が長い時間をかけて自然に向き合ってきた姿勢を今後とも持続する意義を相互に確認しました。（実行委員長 秋道智彌）



## オストロム教授が「レジリアンス」セミナー

資源管理制度について世界的に著名な研究者であるエリノア・オストロム教授（インディアナ大学）を講師に、第12回レジリアンス・セミナーを7月3日、地球研講演室で開催、70名が参加しました。このセミナーは地球研のレジリアンス・プロジェクトが主催し、コモンズ研究会と琵琶湖―淀川プロジェクトとの共催で企画。

オストロム教授は「*Governing the Commons*」や、近年では「*Understanding Institutional Diversity*」など資源管理制度に関する多くの著書により、日本の研究者にもなじみが深く、セミナーには環境経済学世界大会（国立京都国際会館）の参加者や、はるばる遠方からも多くの方が来所し、会場は熱気につつまれました。オストロム教授は「制度分析の研究方法を求めて：資源管理制度の多様性からの視点」と題する講演で、社会には多様なルールが存在する

ことから、複雑な社会・生態学の課題に対して単純な解決策を提示する問題点を指摘し、提案に際しては非常に謙虚であることを強調しました。オストロム教授が近年精力的に行っている異分野の研究者との共同研究はこれからの地球研プロジェクトへの指針ともなると感じました。（梅津千恵子）

## FS研究計画発表会

インキュベーション研究（IS）からフィジビリティ研究（FS）への年度途中の移行を審査するための計画発表会が9月22日、地球研講演室で行われました。今年度の6件のISのうち、「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」（研究代表者：山村則男・京大生態学研究センター教授）から移行希望があり、山村教授が発表。その後、地球研連絡調整会議で可否を協議し、移行が決められました。また、この決定を受けて地球研運営会議で審議し、山





村氏を地球研客員教授に受け入れることとなりました。

#### 第14回地球研市民セミナー

第14回地球研市民セミナーが9月22日に講演室にて行われ、約150人の参加がありました。インダス・プロジェクトのリーダー、長田俊樹教授による「なぜインダス文明は崩壊したのか」と題する講演がありました。謎の多い文明についてのお話のあと、熱心な質疑がかわされました。

発表の要旨は次のようでした。

■  
インダス文明は四大文明の一つですが、エジプト文明、メソポタミア文明、中国文明と比べると、よく知られているとはいえません。そこでまず「インダス文明とは何か」、そして「インダス文明がどう研究されてきたのか」についての説明を行いました。インダス文明は南北1,400km、東西1,600kmの広範囲に約1,500遺跡群が分布しています。これだけの広範囲に、紀元前2500年から紀元前1900年にかけて、都市文明が開花します。「インダス文明の崩壊原因」としては、アーリヤ人侵入説が現在でも流布していますが、この説は現在完全に否定されています。ほかの原因としては、大別するとローカルな環境変動とグローバルな気候変動などがあげられています。また地震などの災害によるという説もあります。しかし、だれもが納得するような説は現在のところありません。我々のプロジェクトでは、砂漠に埋もれているインダス遺跡群に注目しています。じつ

は、ここにはサラスヴァティーと呼ばれる川があったのです。幻のサラスヴァティー川とインダス都市。それらを総合的に研究することによって、この地域の環境史を復元すること、それが我々プロジェクトの目的の一つなのです。



#### 招へい外国人研究者

10月から、チェコ工科大助教授のヨゼフ・クレチェック (KRECEK, Josef) さんが流域管理の実態解析などのテーマに福嶋教授のもとで半年間、またフィリピン大理学部教授のフェルナンド・シリガン (SIRIGAN, Fernando) さんが海底堆積物の解析による人間活動の影響評価をテーマに谷口助教授のもとで7ヶ月間、それぞれ研究されています。

#### インダス・プロジェクトの成果がインドで出版

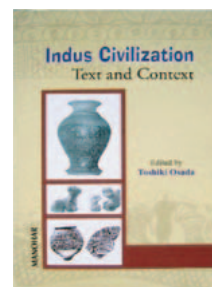
RIHN Library  
Indus Civilization: Text and Context.  
Edited by Toshiki Osada.  
Published by Manohar Publications,  
New Delhi. 2006

『インダス文明：資料と概観』（英文）を地球研ライブラリーとして、インドで上梓しました。インダス・プロジェ

クトでは、2005年に Occasional

Paper: Linguistics, Archaeology and the Human Past と題する不定期雑誌と長田俊樹『インダス文明研究史の回顧と展望及び文献目録』を刊行しましたが、その雑誌に掲載された論文と長田の文献目録を再録した形で出版されたのが本書です。

内容は長田による序文につづき、地球研に1年間滞在されたカラクワル招へい外国人研究員による「インダス文明概観」、ハーヴァード大学のヴィッツェル教授の「南アジアにおける中央アジア起源による文化変容」、そして佐藤洋一郎教授の「イネとインダス文明」です。また、巻末には長田が編集した80ページに及ぶ文献目録が掲載されています。論文はいずれもオリジナルなものです。とくに、ヴィッツェル教授の論文は120ページにわたる力作で、中央アジアと南アジアの歴史的関連を文献によって論証した注目作です。インダス文明を概観したカラクワル論文、イネに焦点をあててインダス文明にふれた佐藤論文をあわせ、今後のインダス文明研究に一石を投じる本となったのではないかと、そう自負しています。今後もインダス・プロジェクトの成果を英文で出版していく所存です。



## プロジェクト研究発表会

地球研で進行しているプロジェクトの成果と、新たなプロジェクトの計画をすべて発表し、100人を超える関係者全員で相互討論する年1回の「プロジェクト研究発表会」を、今年は12月13日から15日までの3日間、京都テルサ（京都市南区東九条）で行います。

## 地球研市民セミナー

第16回地球研市民セミナーは、12月1日、内山純蔵助教授の『「景観」は生きている』です。第17回は、2007年3月9日、川端善一郎教授と奥宮清人助教授の「病気もいろいろ～人の医者、環境の医者」です。いずれも、午後5時半～7時、地球研・講演室で。

## 「人と水」連携塾

人間文化研究機構に所属する5機関（地球研・民博・日文研・国文研・歴博）の連携研究「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」（通称「人と水」研究）の構成メンバーが講師となって市民対象に行う「人と水」連携塾の第1期が、この秋から開講中です。

今後の講義予定は次のとおりです。  
●12月16日(土)、谷口真人(地球研助教授)「京都の酒と湧水」 ●2007年1月20日(土)、小松和彦(日文研教授)「水と信仰：その恵みと災厄をめぐる」 ●2007年2月17日(土)、中野孝教(地球研教授)「人が変えた京都の水」。いずれも午後2時～4時、場所は同志社新島会館(京都市上京区)です。問い合わせ・申し込みは、地球研の連携研究「水と人」事務局(電子メール:m-nishi@

chikyu.ac.jp)へ。

## 「水と文明」シンポジウム

先に挙げた連携研究「人と水」の公開シンポジウムが、2007年2月24日(土)午後1時半～5時、東京神田の一橋記念講堂(学術総合センター内)で開かれます。地球研の秋道智彌教授が司会をし、パネリストは、石澤良昭(上智大学学長)、窪田順平(地球研助教授)、五味文彦(人間文化研究機構理事)、佐藤洋一郎(地球研教授)、安田喜憲(日文研教授)、渡辺千香子(大阪学院短大助教授)の各氏。乾燥地と湿潤地における文明と水との関わりについて論じます。お問い合わせ・聴講申し込みは、上記同様、「水と水」事務局へ。

## 上賀茂だより

地球研の目の前は農家の広い畑になっています。その傍らに、狭いながらも地球研の園芸くらぶが作った花壇と菜園もあります。10人ほどのメンバーは素人ばかりですが、当番で水やりや手入れを続け、鳥や鹿の食害にもめげず、楽しい収穫です。季節の花やソバ、小松菜、こかぶ、ラディッシュ、ハロウィンかぼちゃ…。稔りの秋をかみしめています。(斎藤)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

総合地球環境学研究所報 [地球研ニュース]

■

## Humanity & Nature Newsletter No.5

[隔月刊]

ISSN 1880-8956

■

発行日

2006年12月1日

■

発行所

総合地球環境学研究所

〒603-8047

京都市北区上賀茂本山457番地の4

電話：075-707-2100 [代表]

Eメール：newsletter@chikyu.ac.jp

URL：http://www.chikyu.ac.jp

■

発行

総合地球環境学研究所 広報委員会

委員長

秋道智彌

■

編集

総合地球環境学研究所 地球研ニュース編集委員会

■

協力

[株]シー・ディー・アイ

■

本紙の内容は地球研のウェブサイトにも

掲載しております。

郵送を希望されない方はお申し出ください。

表紙写真—

ラオス南部のメコン河中州にあるコーン島の水田横の小川で  
網漁に従事する島の子供たち

[撮影：秋道智彌]